

まち観帖: まちを観て語り伝えるためのメディア

Machi-mi-chou: A Medium for Experiencing a Town and Storytelling about it

諏訪正樹
Masaki Suwa

加藤文俊
Fumitoshi Kato

慶應義塾大学環境情報学部
Faculty of Environment and Information Studies, Keio University

Town has been one of the interesting targets in field research. Recently, not only researchers but also ordinary people are interested in towns and communities. Especially, town-walking is one of the active interests. If one learns how to see various aspects of town and associate them with the way people live and communities are being formed there, town-walking becomes more and more enjoyable. Through a case-study of walking around two areas in Tokyo, we have designed a methodology, called “Machi-mi-chou”, for experiencing a town, story-telling its experience and luring others to a custom of town-walking. This paper describes in detail the very process of how we have come to design the methodology itself.

1. はじめに

NHK の番組“ブラタモリ”にみるように、まち歩きが流行っている。ひとがまち歩きに魅せられる理由は何だろう？ まちが醸し出す独特の雰囲気を感じ、比較するのは面白いものである。また、“まちの境界”なるものを体感した経験は誰しもあるであろう。

まち歩きは感性開拓の題材として面白い。感性とは、対象とするものや環境のなかに、重要な変数・着眼点・側面(以後、簡便のため「変数」と称する)を見出し、それに自分なりの意味を付与するという認知能力である。まちに見出すことのできる変数には、どのようなものがあるだろうか？例えば、土地の起伏(坂、崖など)、道幅、道の曲がり具合、交差点の形状などはその一例である。細くて急な上り坂に遭遇したとしよう。その坂の上、下に住むひととは、それぞれどのようなコミュニティ意識をもっているだろうか？急な坂が頻繁な行き来を妨げるとすれば、帰属コミュニティは互いに異なると認識しているかもしれない。しかし、急な坂道は登りたい／下りたい衝動を駆り立てることも事実である。そうであるとする、互いに相手コミュニティに対する興味を抱いているであろう。このように、まちに存在する様々なものや空間的状况を変数として意識し、意味を付与する経験を重ねると、まちの様々な姿が見えてくる。つまりまちを観る感性が豊かになる。

感性を磨くことは、生活における学びの最たるものである。学びに関する研究、とくに学びの場づくりに関する研究は、90年代から認知科学で盛んになってきた(例えば、[佐伯 2002])。なかでも協調学習に関する研究は、複数の学び手が自らの役割を見出すことで全体の学びが加速し、発言が互いに触発を与えることが学びをもたらすという現象をとりあげてきた。そのための場づくりの研究事例は枚挙にいとまがない。しかし、実生活を舞台にして、あるひとの学びが他者の学びの仕掛けになり、学びが伝搬し合うという長期に渡る縦断的研究はあまりない。

そこでわれわれは、まちを観る感性を豊かにする学びを語り伝えるための仕掛けとして、まち観帖というシステムを考案した[諏訪 2012]。2章で概説するように、まち観帖は、“まち観房具”、“まち観の型ことば”、“まち観がたり”の三部構成である。まち観の型ことばとは、まちの様々な物理的空間的状况とそれに

付与する意味をペアにして記述した、一種のパターンランゲージ[アレグザンダ 1984]である。諏訪と加藤が、慶應義塾大学SFCの大学院プロジェクト(授業プログラムのひとつ)「生活実践知(Life Knowledge in Practice: 通称 LKiP)」の一プロジェクトとして、月に一度、一回に3時間程度東京のまちを歩き、まちをどう観てどう語るかをまとめた「型ことば」である。

まちを歩いては発見したものごとを二人で議論し、“まち観帖”としてまとめる一年に渡る体験は、まちを観る感性をしいにからだで学ぶと共に、更に研究としての意味付けを醸成するプロセスであった。本論文は、その試行錯誤のプロセスを記述することを目的にする。学びの仕掛けをデザインしましたという(プロダクトの)報告は数多いが、学びの仕掛けをデザインするプロセスそのものを語る研究報告は数多くない。学びの場づくりの研究として、これから重要視されるべき分野である。

2. まち観帖: まちを観る感性を豊かにする仕掛け

2.1 まち歩き活動

われわれは一回に約3時間歩き、その後カフェに入ってその日の体験に関して2時間強の議論をした。まちを歩いた体感には暗黙知である。言語化されにくい体感を外化する手段として、その日の体験から、表現したい体感一つひとつを“一文字の漢字で表現”するという試みを行った。諏訪と加藤が各々、まず複数の漢字をノートに書き、その後それぞれの漢字に関して議論するという手法で、その日の体感を語り合った(漢字の例は3章で挙げる)。

まちに何を観て、何を考えるのか？ そういう問題意識は、多くの場合歩いた後の議論で鮮明になった。したがって次に歩くエリアは問題意識に応じてそのつど決定した。結果的に、東急目黒線の武蔵小山から東横線の学芸大学前付近に至るエリアと、早稲田から神楽坂に至るエリアを、一年間かけて何度も歩くことになった。

2.2 まち観の型ことば

まち観の型ことばは、まちを記述する単位であり、まちを語ることばでもある。われわれは、

「まちに存在するものや物理的空間的状况」
×

「それを観て／体感して、何を感じ、何を想い、どう行動するとよいか」

という型でまち歩き体験を記述し、ひとつひとつの型をカード状のプロダクトとして制作した。まちでそういうものごとに遭遇したときに、われわれがそういう感じ方、想い方、行動の仕方を試みてきたという記録でもある。

型ことばは現在49枚できており、6つのカテゴリから成る。(1)今昔の視点でまちをみる、(2)地図はこう観る、(3)五感でまちを捉える、(4)かつての水路を感じる、(5)コミュニティの繋がり／広がりを感じる、(6)コミュニティのキャパシティを感じる、の6分類である。

図1にカードの一例(第5分類に属する31番のカード)を示す。図の左半分がカードの表面、右半分が裏面である。表面には、「物理的状況×感じ／想い／行動の仕方」形式のタイトルと、それに該当するスポットの写真と、カード番号／分類名が書かれている。このカードは、

「直線状に細く長く続く道にアップダウンがあって、更に道幅が急に変わるスポットがある」ならば、「道幅が変わる前後を行ったり来たりして、コミュニティ感のつながりの有無を考えると」

というまちの見方を記したものである。道が直線か曲がっているか、アップダウンがあるか、急勾配であるか、幅は一定か／不規則な変化があるか／あるスポットで急に変化しているかなどの物理的状況が、それに沿ってコミュニティ感が続くかどうかを決める要因であるというわれわれの仮説を表している。裏面には、その型ことばの詳細な説明、いままでに発見したスポットの緯度経度情報、関連するカード番号、キーワード欄(ユーザがこのカードをもってまち歩きをする際にメモ書きできる欄であり、後で詳しく述べる)が設けられている。



図1: まち観の型ことばの一例(カード番号31番)

2.3 まち観がたり

まちを語るための“型ことば”を得たならば、それを駆使してまちを語ってみることが必要であろうとわれわれは考えた。各々の型ことばは、我々が歩いてみつけたリアルスポットに裏打ちされている。なかでも、武蔵小山から学芸大学前に至る地域と、早稲田から神楽坂に至る地域では、型ことばの源となったスポットが集中していることに気付いた。そこで、4つのエリアを選んで、10数個の型ことばのエッセンスを散りばめる形で、そのまちで連想される架空の物語を書き下ろした。それが“まち観がたり”であ

る。4つのまち観がたりは、まち観帖サイト¹からダウンロードできるので読んでみていただきたい。

早稲田駅の少し東から外苑東通りに向かって細く延びる路地がある。外苑東通りに出る手前に夏目漱石が晩年を過ごした敷地があり、現在は記念館が建っている。まち観がたりのひとつ「弁天町今昔」(まち観帖サイトを参照)は、漱石が生きた時代のその限界にはどのようなコミュニティ感があったかを想像した短編ストーリーであり、15個の型ことばが散りばめられている。型ことばの要素が散りばめられている箇所には下線を引いて、該当する型ことばの番号と注釈がついている。

2.4 仕掛けとしてのまち観帖

人は、他人が学んだ結晶としての型ことばを、「これがまちの見方／感じ方」ですと言われてただ与えられても、型ことばに興味を抱けないに違いない。われわれは“まち観がたり”が、他者をまち歩きの学びの場に誘い込むメディアとして機能すると考える。まち観がたりは物語なので、執筆者があるまちで感じたことを受容するメディアとして最適である。まち観がたりを読めば、そこに散りばめられた“型ことば”に自然に触れることができる。なかには、興味をそそられる“型ことば”が見つかるかもしれない。

もし幾つかの型ことばに興味を抱いたら、そのカードを携えてまちに繰り出したくなるはずである。まずは、他者が書いた“型ことば”に合致するスポットを見つけることを目指せばよい。リアルスポットの緯度経度情報も載っているので、そこを訪れて確認するのもよい。合致するスポットを見つけたら地図にカード番号を記し、緯度経度も調べてカードに記入する。他者が制作した型ことばの視点でまちを歩き、まちを感じることから始めるわけである。それによって、通常は看過してしまうであろう物理的状況や痕跡に敏感になることができる。

型ことばの視点でまちを観ることに慣れたら、型ことばが集中するエリアをみつけだし、そのエリアに関するまち観がたりを自分で執筆してみるのがよい。散りばめるべき型ことばを念頭に置きながら、登場人物やストーリーを組立てる。

それと並行して、まちで自分オリジナルの“型ことば”をみつけることも試みる。そこまで辿り着けば、そのひとは既にまちを観るエキスパートである。あるひとが書いたまち観がたりは別の誰かへの仕掛けとなり、まち歩きの輪が広がる。「他者のまち観がたりから入って、型ことばに興味を抱き、しだいに自分の型ことばとまち観がたりを手に入れる」という学びの伝搬方法論である。

2.5 まち観房具



図2: まち観房具

興味を抱いた型ことばのカードを携えてまちを歩くときに“まち観房具”が役に立つ。歩くときに地図は必須である。地図と型ことばのカード10枚弱をうまく束ねて持ち歩く房具であり、手引書に準備方法が書かれている。図2にわれわれが制作したまち観

¹ <http://metacog.jp/projects/lkip/project001.html>

房具を示す。後述するが、地図以外にも様々な道具があったほうがよい。われわれはそれらを携帯してまちを歩くことは意外に煩雑であることを一年の経験から感じ、歩くための房具を制作した。煩雑が多いと、まちで観たり感じたり考える認知が阻害される。地図の折り方をはじめ、煩雑さを防ぎ快適に歩くための工夫が施されている。

3. まち観帖ができるまでの軌跡

3.1 持参機器の工夫

われわれは地図、IC レコーダー2つ、メモ帳と筆記用具、デジカメ、iPhone アプリ“東京時層地図”を持参して歩いた。地図は、路地の存在や道幅の変化が見える縮尺で印刷した(経験的には5000分の1程度)。3時間の歩きをカバーする範囲として、南北東西ともに約3kmのエリアがあればよい。

IC レコーダーは、同時に録音開始したものを各自が装着し、歩きだけでなく議論の時間帯も録音を継続した。本体はポケットにしまいピンマイクを襟元に装着しておけば、行動への支障はない。あとで音声編集ソフトに両者を読み込み、簡単な同期作業で会話が再現できる。各々が装着しているからこそ、まちで一瞬両者の距離が離れることがあっても、声が録音できているか心配する必要がなく、行動の束縛がない。

歩きながら気づいたことはメモをし、気になった風景、もの、物理的状況は写真を撮る。

後述するように iPhone アプリ“東京時層地図”は役に立った。現在立っているスポットが GPS で明示された上で、その周辺の古地図を年代ごと(明治から昭和を経て現在まで数段階)にみることができる。

3.2 昔の水路との遭遇がコミュニティを想う転機になる

歩き始めた当初は、まちの雰囲気がある所から急になくなるような“際”(まちの境界)を見出したいという意図をもっていった。この時点では、まちのコミュニティ感がどのように形成されるのかに関して、強い問題意識を抱いていたわけではなかった。

転機は、2010年12月17日に武蔵小山で、区の道路開発と拮抗して建つ散髪屋をみつけたときに訪れた。そこは加藤の旧知の地域である。「このあたりの道、昔はこんな風じゃなかったのですよ」と彼が言い出したことがきっかけで、iPhone アプリ“東京時層地図”をふと見ることになった。古地図でみつけたのは、その散髪屋の前の道路がかつては品川用水であったことである。品川用水は玉川上水から分水され、世田谷区、品川区、太田区などを流れ、近隣住民の生活用水を担っていた。いまは完全に埋められて下水道として機能し、その上は道路になっている。用水の存在が、住民のコミュニケーションのあり方やコミュニティ感を想起させた。水路が走るまちのコミュニティはどう延び、どう広がっていたのだろうかという問題意識がわれわれに生まれた。土地の起伏、坂道の勾配、道幅、交差点の形状、造成区画の区割りなど、様々なまちの状況がコミュニティ感に影響するであろう。とくに、水路や主要道路は重要で、それに沿ってコミュニティは滲み広がるように延びるとするならば、まちの境界は滑らかな線で描かれるという単純なものではない。

散髪屋が区の道路開発と拮抗して立ち退かないでいるのは、道路開発が品川用水に沿った昔からのコミュニティの広がりを分断するものだからではないかとわれわれは解釈した。この日の体験を表現する漢字として諏訪は“断”や“延”を挙げている。更に、行政区分が必ずしも住民のコミュニティ意識に寄り添わないことも感じ取った。かつて品川用水だったその道は、実は現在の区の境界線であるのだ。用水に沿ってコミュニティ意識が

延びるとすると、用水を挟んだ両側の住民は同じコミュニティに帰属していると感じるはずである。それにも関わらず、その道が区の境界である(両側が異なる区に属する)のは住民感情には合わない。

これ以後のわれわれは、古地図をみながら品川用水を辿り、まちに観察できる些細なものや物理的空間的状況という変数に留意して、とくに水とコミュニティの関係性という視点から、今と昔を重ね合わせる視点でまちを観ることに傾倒していった。

3.3 コミュニティの連なりを意識しながら歩く

われわれのまち歩きは、徐々に「水の痕跡を辿る」という、より焦点を絞った活動へと変化した。上述のとおり、直接のきっかけは、武蔵小山で品川用水の痕跡を身体的に感じたことであるが、単純なことながら、用水がどのように伸びている(伸びていた)のかを知るべく、それ以降のまち歩きが計画されることになり、われわれは品川用水を辿りながら、かつて海へと注いでいた立会川の近辺まで歩くことになる。この時点で、われわれが注視するモノ・コトは、プロジェクトを開始した当初に比べるとかなり限定的になったが、以下の2つの点で有意義な変化だったと言える。

まず、武蔵小山近辺で得られた知見(見方/感じ方)を、同じ品川用水の上(周辺)でも確認できるかという問題意識を抱くようになった。それは言い換えるならば、われわれがまち歩きの実践で感じ始めていた、まちを理解するためのヒントやきっかけが、他の地点でも適用できるかを検証する作業である。水の痕跡を感じるための手がかりが他の場所でも見つかるのか。散髪屋と同様の解釈や意味づけが可能な場所は他にもあるのか。徐々に醸成され始めていたわれわれの「作業仮説」を、かつての川筋に沿って確認しつつ、一般化・概念化について考えることになった。

また、コミュニティとコミュニティとの関係性への関心も深まった。言うまでもなく、水(用水)は人々の暮らしの痕跡である。かつての風景を想起させるモノ・コトを見留めながらまちを“観る”という実践を、用水に沿って続けることで、もう少し広いエリアに渡るまちの姿をイメージできるようになった。それぞれの地域コミュニティは、ユニークな特性を持っているはずだが、それが用水や道で結ばれたとき、まとまりをもった地域観を提供してくれる。手にしていた地図に引かれた人為的な境界線ではなく、かつての生活者たちの目線でその境界線を引き直すことによって、重層的なコミュニティの理解が可能であることを再認識することができた。

3.4 まちを語るための“型ことば”という考え方の誕生

歩き始めて半年が経過して、些細なものや空間的状況に留意し、そこにコミュニティ意識という視点の意味を付与する“まちの見方/感じ方”がわれわれのからだに染み付いてきた。異なる場所に同じ見方/感じ方ができる事例もたくさんみつかった。例えば、道幅が不規則に変化する狭い道が長く伸びている場合、それはかつての水路の痕跡かもしれないというパターン(型ことば15番)は多くの場所でみつかった。かつての品川用水に沿う道には、風呂屋、コインランドリー、クリーニング店が異様に多いことにも気づいた(型ことば23番)。様々な道を歩いて集めた事例を少し抽象度の高いことばで表現すれば、それはまちを語るための“型ことば”になるのではないかと考えがわれわれに芽生えてきたのはこの時期である。

型ことばは一種のパターンランゲージであることにもすぐ気づいた。パターンランゲージとは、建築家のアレグザンダーが家の間取り、敷地内のレイアウト、コミュニティのつくりかた、都市計画に至る様々なレベルでのデザイン手法を一定形式に書き下したパタ

ン集である[アレグザンダ 1984]. 型ことばの表現形式が 2.2 節で示した○○×○○という形になったのは、ものや空間的狀況に意味を付与するという見方でまちを体験したからであろう。

3.5 物語としての“まち観がたり”の考え方の誕生

まちを語るための型ことばだけを発信したとして、他者をまち歩きに誘う媒体になるだろうか？ われわれはまち歩きにおける学びの方法論をつくりたいのだ。他人がつくったパタンランゲージをただ与えられるだけでは、まち歩きを始めてみようという動機は湧きにくいのではないかと。まちを歩いて感じる実体験から制作した型ことばであったからこそ、この問題意識が生まれた。そして、この問題意識は常々われわれがパタンランゲージに感じていた疑問そのものであると、明確に思うことになった。

まち歩きに限らず、ひとを誘い込むには、心に訴えかける“物語”という仕掛けが必要なのではないか？ 一般にひとは自分の体験や他者の話しを“物語”として理解することが心理学ではよく知られている。型ことばを地図上にプロットしたときに、多くの型ことばが集中するエリアが集中していたと 2.3 節で述べたが、それはそのエリアを歩くと様々な感じ方／想い／行動が喚起されることを意味する。様々な感じ方が生じる密度が高いのならば、それを登場人物に語らせることで、その土地に住むひとの、その土地だからこそ形成される心象風景の物語を描けるのではないかと。こうして、型ことばを散りばめる形で書き下ろす“まち観がたり”という物語のアイデアが誕生した。

3.6 “型ことば”という形式に書き下す際の方針

「ものや物理的状況」×「感じ方／想い方／行動の仕方」というフォーマットに書き下す際に、「ものや物理的状況」をどう一般化して書くかを決めるのは難しかった。われわれがまちで遭遇した生の事例に厳密になろうとすると、「ものや物理的状況」が specific になりすぎてしまう。どの条件とどの条件は and 結合であるべきで、どれとどれは or 結合か？ 考え始めるときりがない。例えば、3.4 節で言及した 23 番の型ことばは、「銭湯の煙突」×「水を想う」である。銭湯、コインランドリー、クリーニング店がかつての用水路の痕跡であることを示す型ことばである。厳密に書くならば、「ものや物理的状況」の欄は、銭湯 or コインランドリー or クリーニング店となるところであるが、われわれは敢えて「銭湯」だけを記述し、他の2つはカードの詳細説明の欄に「よくある例」として記述した。つまり、何か本質的な条件のみ、もしくは代表的な条件のみを書けばよいのである。型ことばは厳密なルールとして記述することが目的ではなく、あくまでも他者がそのカードを携行するときに、まちの見方に新たな視点を与えることが目的であるからである。

3.7 “型ことば”の6つのカテゴリーが出来るまで

われわれは、一連のプロセスをふまえて“型ことば”の分類枠組みを作成した。筆者らが個別に記述していた“型ことば”を印字した用紙を短冊状に切り離し、KJ 法を用いてグルーピングを行い、カテゴリーの導出を試みた。まず、われわれのまち歩きの直接体験から、「今昔の視点でまちを観ること」「かつての水路を感じる」「コミュニティの繋がりをを感じる」という3つのカテゴリーができた。これらは、個別具体的な時間・場所と対応づけられ、筆者らの共通体験として了解されている状況の記述をふくんでいたため、比較的スムーズにグループ分けの作業が進行した。言葉使いやニュアンスに多少の差はあるものの、現場でのコミュニケーション体験を反芻しながら取り組むことができた。

また、「地図の見方」「五感でまちを捉えること」という分類も重要であることに気が付き、新たないくつかを書き足した。これらのカ

テゴリーも、われわれのまち歩きの体験から発想されたものであるが、“まち観房具”や“まち観がたり”をふくめた“まち観”の実践を想定した際に必要となる準備や、基本的な振る舞いをまとめたカテゴリーである。これにより、われわれの提唱する実践への導入や日常的な練習(トレーニング)といった側面も併せて扱えることになるだろう。

さらに、地域コミュニティのもつ潜在的な可能性や、(すぐさま観察可能ではないものの)時間を経て蓄積されてきた地域の文化的側面について語るための“型ことば”も、いくつか加えることになり、「コミュニティのキャパシティ」という新たなカテゴリーが生まれた。これは、やや抽象的ではあるが、地域コミュニティに根ざし、永きにわたって価値を生み出し続けるような「地域コミュニティの品性」ともいべきもので、地域への親近感や愛着について考える際に必要となるはずだ。われわれが綴るまちの“物語”には、有形で観察可能なモノ・コトだけではなく、無形の文化的・精神的な価値を語ることも必要であろう。近年、注目を集めている「シビック・プライド」といった概念とも関連づけながら、“まち観”を実践できることになる。

こうして、一連の“型ことば”は、フィールドに向かう前の準備に関わる側面と、抽象度を上げて一般化・概念化に関わる側面について新たな分類を加え 6 つのカテゴリーで整理されることになった。1年にわたるフィールドワークの体験から直接導出されたカテゴリーを前提に、フィールドノートや書き込みのある地図を眺めながらのディスカッションを通じて、われわれは、“まち観帖”全体を、一つのプロセスとして設計することの意義を再確認した。前述のとおり、型ことばは文字通りことばに過ぎず、われわれがこのことばを使おうと試みることによって、一筋の“物語”という形になって立ち現れる。それは他者を誘う仕掛けとして働く。

4. 考察

まち観帖としてまとめる頃に、目黒区上目黒蛇崩エリアを歩いた。用水の痕跡のひとつである S 字交差点(型ことば 34 番)から少し離れたところの建物にふたりとも目を留めた。「これ、もと風呂屋なんじゃない?」。どちらからともなくそう言い出した。いまや煙突もない。シャッターの降りた入り口らしきものが2つ並んでいることには後で気づいた。その付近に用水の痕跡をいくつも体感しながら歩いていたからこそ、煙突もないのにそれが昔の風呂屋であることを見逃さなかったのだろう。1年経って、われわれのからだはそんな痕跡にも反応するほど進化を遂げていたのだ。ふたりとも思わずにやにやした。まち歩きはからだに効く。

まち観がたりは、われわれもまだ2つずつ執筆しただけである。執筆方法論の模索は今後の研究課題である。ただ、まち観帖の成果のひとつは、まちを歩いて型ことばを発見しさえすれば、その土地に住む人にインタビューをするといった従来型のフィールド調査に依らず、その土地の物語を書くことができることにある。この手法が広まれば、全国の至る所で、土地に市民が執筆した物語が貼付けられる状況を生む。“地積学”(土地を解釈する)ともいべき学問分野の誕生に繋がるかもしれない。

参考文献

- [佐伯 2002] 佐伯胖: 「学ぶ」ということの意味, 岩波書店, 2002.
- [諏訪 2012] 諏訪正樹, 加藤文俊: まち観帖: まちを観て体感し語るための方法論, 人工知能学会第9回身体知研究会, SKL-12-04, pp. 16-21, 2012.
- [アレグザンダ 1984] クリストファー・アレグザンダ(平田翰那訳): パタン・ランゲージ環境設計の手引, 鹿島出版会, 1984.